琉球大学学術リポジトリ

退職記念号へ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 我部, 政明, Gabe, Masaaki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/381

退職記念号へ

我　部　政　明

明治の荒野に始まり、貧困と離散を経て、占領と軍事基地と隣り合う生活を余儀なくされてきた沖縄において、一世紀を越えて今なお、水の絶えることのない思想の泉によって生き延びてきた人々をこよなく愛し、現在を生きる人々に向けて将来への道標を立て続けている人間、それが比屋根照夫である。

研究者というより、今では古めかしい言葉となった「学者」であり「言論人」であるというのが、比屋根照夫に相応しい表現なのかもしれない。教育や研究に携わるアカデミック（academic）な人であると同時に、自らの知識を通じて社会変革をめざすインテレクチュアル（intellectual）な人である。ここに教授や先生という肩書きを記さなかった理由は、比屋根照夫の存在そのものが研究の対象となり始めているからだ。

ある研究者が、目覚しい成果や鋭い視点を見出したことによって他の多くの研究によって引用という形で紹介されること、ときに批判の対象とされること、などは珍しくない。それは、あくまでも同じく研究をする立場にいることを前提にしている。アカデミアの内側にいるのかどうかは、研究者自身の自己規定によることが多い。また、大学や研究機関に属しているだけで、十分にアカデミックな人であるともいわれる。

しかし、インテレクチュアルな立場とは、研究を深めつつ蓄積されてきた知識を媒介にして変革へと向かう姿勢をもった人である、と他者からの評価を必要とする。特定の時代と空間のなかである人の存在が描かれるとき、その人はその社会と対話をするインテレクチュアルな人間と捉えられるのである。

研究者としての比屋根照夫を知るには、彼の代表的な著作である『近代日本と伊波普猷』（三一書房、1981年）、『自由民権思想と沖縄』（研文出版、1982年）、『アジアへの架橋』（沖縄タイムス、1994年）、『近代沖縄の精神史』（社会評論社、1996年）などをご一読するよう勧めたい。往谷一彦－『日本の意識－思想における人間の研究』（岩波書店、1982年）、鹿野政直の『沖縄の淵：伊波普猷とその時代』（岩波書店、1993年）、小熊英二の『「日本人」の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』（新曜社、1998年）、伊高浩昭『双頭の沖縄：アイデンティティー危機』、（現代企画室、2001）、大江健三郎「沖縄の『塊』から」（『言い難き嘆きもて』所収、講談社、2001）などには、インテレクチュアルな人物としての比屋根が描かれている。そこには、自らの時代に挑戦し、切り開こうとする戦後沖縄の知識人の一人として比屋根がいる。

比屋根照夫が日本政治思想研究の世界へと入っていたのは、当時、まだ東京都文京区茗荷谷にあった東京教育大学大学院の頃である。特に、幕末から近代にかけての日本の思想家たちの世界観や西欧科学観の研究に取り組んでいた松本三之介の下で知的訓練の機会を得たことは、比屋根にとって覚醒と飛躍の礎石となったのではないだろうか。また、戦争で荒廃した沖縄で育ち、琉球大学で学んだことが、インテレクチュアルな行動への原点となったのだろう。1950年後半「島ぐるみ闘争」の熱気のなかでの高校生生活、大学入学後の1960年安保、特にアイゼンハワーの沖縄訪問に向けた抗議行動への参加によって、社会変革への自らの姿勢を培ったちがいない。

当時の琉球大学で政治学を教えていたのは、島袋邦（政治学、1994年退官後に名誉教授）、比嘉幹郎（比較政治学と行政学、1979年に沖縄県副知事）、そして卒業の頃に沖縄へ戻ってきた宮里政玄（国際政治学、1980年に国際大学教授）などである。今では日本の政治学の主流をなすが、当時の日本ではヨーロッパで育まれた政治学に比べ新参者扱いをされていたアメリカ政治学の影響をうけ

たこれらの人々の下で、比屋根は大学生生活を送った。そして、沖縄返還後の1973年に東京での研究生活に終止符を打って、琉球大学の教壇に立つことになる。同じ頃に、琉球大学を経て東京の大学院で研究者としての知的訓練を積んだ仲間たちがいた。比嘉政夫（沖縄大学教授）、我部政男（山梨学院大学教授）、仲程昌徳（琉球大学教授）、上里賢一（琉大教授）、比嘉実（元法政大学助教授）などだ。

教室や研究室だけでなく大学の外において、比屋根が熱く語る沖縄の思想家たちに触れて沖縄研究に分け入った若者たちが数多くいる。彼らのなかから、歴史の証人としての比屋根を描き出そうとする若き研究者が登場している。例えば、「けーし風」（2003年夏）にて発言する比屋根には、1950年代という時代のうねりと自らの存在を後世に伝える役割が与えられている。

定年退職で琉球大学を去ることになる比屋根照夫に、大学に残る者として心より感謝申し上げたい。そして、20世紀後半から21世紀前半を生きるインテレクチュアリスト・比屋根照夫の軌跡を伴走したいと思う。

2004年11月３日